

エミール

平成19年12月25日
四季報（通巻第15号）

発行：三重県児童相談センター
電話059-231-5902

「CDC（子ども解離チェックリスト）を用いた被虐待児の特徴について

伊賀児童相談所長 今井 芳裕

今回、以前の職場で、CDCを用い12ヶ月間被虐待児を追ってみた結果を、お話ししたいと思います。

CDCは、観察者の報告尺度であり、毎月定期的に20項目を3段階（よくある、時々ある、全くない）回答の形式をとっています。対象人数は21名（小学生13名、中学生8名）です。紙面の関係上、図、グラフ等は省き、主な結果をお話しいたします。

- 1 全ケースの平均点より比較的高い得点項目は、「性格が変わる」「退行がみられる」「経験から学ぶことが難しい」「自分の間違っただ行動を否定し続ける」「理由もなく怒りを爆発させる」でした。

*いずれも、本質的な「解離」（自己分割）というよりは、つまり、「解離」の主症状ではなく、2次、3次的な症状が出ており、情緒的易変性や外的刺激に対する反応しやすさに関連する部分で、ボーダーラインにみられる「見捨てられ」と「怒り」に由来するものに似ています。

- 2 平均点より比較的低い得点だったものは、「自分自身と話していることがよくある」「誰かの声が話しかけてくる」「はっきりした空想の友達がいる」「夢遊歩行することがよくある」の順でした。

* 解離性健忘、アイデンティティの変容の項目ですが、いわゆる「人格が割れている」かたちでの解離、そして、その際の時間的連続性の欠損に関わる領域であると思われます。見方によっては、「小児精神病的エピソード」にも似ていますが、やはり、性格傾向にまとまりのない子どもには見えにくい、表れにくいものではないかと思われます

- 3 項目別経時的変化では、

(1) 初回、高得点から徐々に低下している項目は、「経験から学ぶことが難しい」

「自分の間違っただ行動を否定し続ける」「性的に早熟」でした。

*態度、情報、知識、行動の項目ですが、生活の安定化と習慣の繰り返し化によって、変化し易い部分なので、このように変化したように見えるのではないのでしょうか。

(2)初回より2、3回目に得点が上昇している項目は、「性格が急に変わる」「退行がみられる」「自傷行為」「頭痛や腹痛など体の症状の訴えがこころ変わる」「理由もなく激しい怒りを爆発させることがよくある」でした。

*「退行がみられる」に代表されるように、安心できる空間における退行や表現化(カタルシス)的な特徴が感じられます。つまり、ある程度、安心する中での症状であったり、その懐疑に伴うテストングとしての行動化のように思われます。

4 種類別については、特に今回は、身体的虐待とネグレクトについてみてみました。身体的虐待において平均点より特に高いものは、「性格が変わる」「経験から学ぶことが難しい」「退行」「性的に早熟」であり、ネグレクトにおいて平均点より特に高いものは、「理由もなく激しい怒りを爆発させる」「性格が変わる」「自分の間違っただ行動を否定しつづける」「自傷行為」でした。

5 虐待を受けた期間別の6年以上では、平均点以上を常に上まわっています。特に身体的虐待においては、6年以上の場合、一旦減少したものの再び、上昇するという特徴がみられます。これに比べて、1年未満では、平均より低く徐々に下がっています。

*特に、身体的虐待については、ネグレクトに比べ、虐待の態度に一貫性がないために被虐待の期間が長くなる程、治療が難しくなるのではないかと考えられます。

6 診断名別では、特に、ICD10によるF4(神経性障害、ストレス関連障害及び身体表現性障害)とF9(小児期及び青年期に通常発生する行動並びに情緒の障害)との関係について見てみました。

F4がF9を上回っている項目は、「苦痛な体験を思い出せなかったり、無かったと否定する」「性格が急に変わる」「性的に早熟」でした。これは、重度ストレス反応における解離のあり方が表現されています。

*親愛と親密さを受け取るべきはずの家族から受けるトラウマは、それ自体が性的同一性を失敗させ、性的早熟や乱脈を生じやすいような、「性化行動」を惹起しやすく、かつ、ストレス(トラウマ)そのものが障害になっている故に、それを思い出させないような「否認」が生じやすくなっていると言えます。

7 F9がF4を上回っている項目は「経験から学ぶことが難しい」「自傷行為」「理由もなく怒りを爆発させる」でした。

*これは、多動性障害の発達障害児の特性と解離との関連が示唆されます。つまり、

これらの項目は、いずれも多動性障害における抑制の難しさや衝動性、行動や感情の脈絡のなさ、そのものです。即ち、トラウマ体験のような自己否定的現象は、その人のもともと持っている弱い部分をかえって強調し、表面化させてしまう悪条件を成しやすいとも考えられます。

- 8 年齢層でみた場合、全体なら（F4）、（F9）双方で高い項目は、「性格が急に変わる」ですが中学生においてF9では全く出てなく（F4）のみです。小学生では、双方で高くなっています。

*ここにトラウマに伴う性格易変性のような特徴は、実は思春期以降でこそ論じられる次元のものではないかと思われます。つまり、「性格」そのものが決定してくる、或いは性格を形成する時期の思春期以降で、トラウマは、その影響と侵襲を明らかにしてくるものと考えられます。逆に、小学生のみで、F9だけが高く出ているのは、「経験から学ぶことが難しい」で、F4だけが低いのは「性格が急に変わる」「苦痛な体験を思い出せなかったり」「自分のまちがった行動を否定し続ける」「性的に早熟」です。

やはり、小学生期の多動性障害の目立つ頃には、「多動」の弱いところが強調される為でしょう。（中学生以降では、多動とこれに伴う問題は目立たなくなるのではないのでしょうか）。逆に、重度ストレス障害となって表れる症状は、まだ問題行動としては、潜伏している時期にあるにも関わらず、既に小学校期（つまり前思春期）から、「性化行動への危うさ」と「キレル」ようなつながりなさを、早々に生じさせると言うことではないのでしょうか。

- 9 被虐待と解離を考える場合、着目方法として最も得点の高い項目に注目すべきです。そうすると、「性格が急に変わる」「退行がみられる」「経験から学ぶことが難しい」「理由もなく怒りを爆発させる」等に特徴的な得点化があります。

*つまり、「子どもの場合の解離」としては、大人のようなまとまった人格の非連続感情状態の断絶ではなく、むしろ、必要以上の外的刺激への反応性と情緒的易変性、それに伴って容易に対象を選ばず退行を生じるといった情緒、愛着の一貫性のなさになり易いのだと推察されます。

見方を変えれば、この特徴は、対象の恒常性の育ちにくい「見捨てられ感情」と「それに伴う怒り」「その欠損を外的に埋めようとする内的制御性の危弱さ」といったボーダーライン的傾向に酷似していて、結果的に子どもの受けた虐待による「解離」とは、このような人を内面化する際の愛着や情緒的欠損と、感情統制の弱さ（アンヘドニア性）に結びついているようにも思われます。

身体的虐待とネグレクトの相違について言えば、前者は、不適切ながらもエネルギーを子どもに向けているが、子どもにダメージを与えており、そのため子どもは

「関係を作ることのやり方の誤り(再演化)」になりやすいのではないのでしょうか。

ネグレクトは、正反対で、子どもに向けるエネルギーは失われていて、情緒な接触を子どもと持つことも殆ど無い状況(いわゆるデタッチメント)で、そのため子どもは、「関係を作ること自体の困難さ、感覚の欠落」になり易いのではないのでしょうか。

その意味で「理由もなく激しい怒りを爆発させることがよくある」「間違っただ行動を否定し続ける」「日によってムラがある」「日時感覚が非常に乏しい」「自分のことを時々、あいつ、あの子などと独り言を言う」は要検討項目で、ネグレクト性が解釈されるのに適当な部分「自らの中の統一した感覚が育っておらず、対人関係の中で修正されることの難しさ」ではないのでしょうか。

心に残る言葉 2007

紀州児童相談所 中井克佳

あわただしく 2007 年が暮れようとしています。このエミールを読んでいただいているのは、もう新年ではないのでしょうか。

さて、私、本年度 4 月から、紀州児童相談所配属となりました。福祉の仕事は初めての経験、学びの日々が続いています。未だ駆け出しで、機関誌に寄稿することすら、おこがましいかぎりです。今年一年、たくさんの方々から心に染みた言葉をたくさんいただきました。ここに感謝の意を込めて、3つを選んで紹介させていただきます。

一つ目は、紀州児相の至宝である虐待防止協力員さんの言葉、「相手を変えようとしないで、相手と一緒に変わっていく」。ドアの隙間越しに、緊張感を持たれている方。無理をしたら、次回から訪問拒否されかねない状況。そんなとき、「突然来たばかりなのに、緊張しますよね。私も緊張しています。」と声をかけるとのこと。そして、ほんの少しだけ話をして、「また、寄せてくださいね。」と、笑顔で退いてくるそうです。何回か繰り返している内に、細かったドアの隙間が、いつしか広がり、迎え入れてくれるそうです。相手の行動の変容に焦点をあてるのではなく、まず感情に焦点をあてて共感する。児童相談モデルのカウンセリングの初歩。培ってきたその極意を、この言葉の中に感じました。

二つ目は、児童相談センター研修の講師、橋本徹先生の言葉、「うまくやろうとしてはいけません。わかってあげようとしなさい」。正確に言うと、この言葉は、橋本徹先生が 7 年前に語った言葉です。当時、橋本先生と教職員対象の学習会を企画運営していました。先生は講義の中で、論理療法にしても、ソリューションフォーカストアプローチにしても、相談者をスキルにのせることを戒めました。「まずは、相談者ありきである」、と。

先頃、家族再生プログラムについて検討しているとき、「どうして虐待してしまうのか。そのメカニズムをわかってあげるところからスタートすべきではないか」という意見を拝聴しました。その根底に流れている思想は、橋本先生の思想と同値ではないかと思います。橋本先生とアセスメントについてお話しできることを楽しみにしていましたが、8月、突然ご逝去なされました。先生の偉大な足跡に感謝して、紹介させていただきます。

最後は、ありふれた言葉ですが、「ありがとう」。相談を受けているケースのおばあちゃんは、「ワシは年寄りやで、孫らに何も残したれん。そやけど、感謝する気持ちだけは教えたりたいんや」と語っていました。

おばあちゃんとお会いして一月たち、二月たち、おばあちゃんの家には、近所の方たちの出入りが増えてきました。小さな子をあずかってくれる人もいれば、祭りの準備に誘いに來る人もいます。民生委員さん曰く、「子どもたちは明るく、ええ子になってきた。何よりも、感謝する心がええ。『ありがとう』に、ええ心があらわれとる」。

紀州を貫く熊野古道。いにしへの時代、巡礼者たちは果てしなく続く深い森の中で、生かされている自分に気づき、感謝しながら歩きました。また、郷の人々も、日照り、洪水、東南海大地震などの自然の猛威にさらされ、身を寄せ合い生きる中で、「支え合って生きる」という独特の共生文化を育みました。

時は流れても、おばあちゃんの「ありがとう」は、現代においても輝きを放っているように思います。おばあちゃんから子どもたちへ。子どもたちから、さらに多くの人々へ。「ありがとう」の心の豊かさが、聴く人の心に染み、未来に広がっていくことを願います。

今年も、たくさんの出会いの中で、多くのことを学ばせていただきました。児童福祉の経験の深い先達のみなさん、これからも私たちにその叢智を語りかけてください。

また、若いエネルギーで三重の児童福祉を支えておられるみなさん、2008年も一緒にいい汗を流しあいましょう。2008年も、素晴らしい一年でありますように。

紀州から、多謝

関係者の皆様方に

伊賀児童相談所 村木裕一

児童相談所で仕事をしていると、子どもと関わる様々な職種の方と出会う機会があります。

児童の福祉や教育はそのような多くの関係者の方々の日々の絶え間ない努力と献身によって支えられていると感じています。

虐待の相談では、学校や保育所の先生が食事や衣服などを整えて、不衛生な家庭環境をできるだけ補い、子ども達が安心して甘えられ、頼ることができる大人として、子ども達に暖かく接しておられる姿を見聞きします。また、保護者からの不満・批判の矢面に立ちながらも、子どものためにと話し合おうと積極的に保護者に働きかけられたり、保護者からの相談に根気よく耳を傾けられている先生もおられます。

発達や障害の相談では、限られた学校や保育所の体制の中で、なんとかその子の発達を伸ばそうと、手作りの教材や遊具を作るなどの工夫をされたり、相談に同席された際には熱心に質問されることがあります。情緒的な難しさを抱える子どもが教室から飛び出すのを身を挺して守り、青あざや噛みつかれた跡がいくつも残っている先生にもお会いすることもありました。

児童養護施設などの施設職員の方々は、日々子ども達の養育には体力的にも厳しいものがあると思います。それに加えて、多くは虐待の結果により、家庭を離れて暮らすことになった子ども達の気持ちを受け止め、時には思春期の苛立った感情の矛先となり、子どもとの関係に苦慮されながらも、なんとか子ども達と向き合おうとしておられます。

市町の児童福祉担当の相談員さんや保健師さんは、身近な相談相手として絶え間なく、また根気よく関わり、子どもと家庭の生活を支えておられます。小さなことから深刻なことまで広範囲な相談を受け、必要に応じて関係機関との連携を図られています。

それぞれの職務であるとはいえ、また時には本来の職務の範囲を超えて子ども達のために献身されている姿には頭が下がる思いであり、しかもそれが毎日のことであるということにも畏敬の念を感じざるをえません。皆様が自分と関わることになった子どもの健やかな成長を願っているがゆえに、時間や労力を惜しまずに仕事をされているのではないかと感じています。

児童相談所は、一時保護や施設入所措置など、その有する権限ゆえに、子どもと家族の生活や人生に大きな転換をもたらすことがあります。児童福祉における児童相談所の役割と責任の大きさは言うまでもありません。しかしながら、児童相談所だけで完結するような相談などなく、常に関係者の皆様のこれまでの関わりがあつてこそ、児童相談所が関わるができるのだと考えています。また、子ども達にとっても、大人になって振り返ってみて、心に残るのは、毎日顔を合わせて自分のことを考えてくれた人ではないでしょうか。

関係者の方々への感謝と畏敬の念は、改めて書くようなものではなく、常日頃から伝えていくべき思いなのかもしれませんが、普段直接口にして伝えることも少ないため、今回の機会に書かせて頂きました。

愛着障害と脳

<子を愛せない母 母を拒否する子、> ヘネシー・澄子著から

三重県児童相談センター所長 上廣 正男

毎年、率先実行取組において、職員自らが企画する自主的勉強会を奨励していますが、今年度、中勢児童相談所では、ヘネシー・澄子氏著の本読み会を定期的に行っています。この本の概要をまとめてみました。

愛着障害は、遺伝でなく、胎児から5歳までの、母親と又は出生後母親不在のときの母親の代わりに務めた人たちと乳幼児との関わり合いの有無によって、未発達の脳が起こす感情面、行動面、思考面、人間関係、身体面、道徳面や倫理感における障害です。

胎児期

受精から2週間後三つの層に分かれ、上辺の層は皮膚と未来の脳に中層は筋肉、骨組み、心臓、血液、排泄組織に内層は内臓になります。

4週間目になりますと、心臓が鼓動してきます。

8～16週では、細胞移動期といわれ、放射線、麻薬、アルコール等の影響を受けやすい時期です。

母体が放射能を浴びると脳細胞の移動が中断され、知的障害を起こすことがあるといわれています。

アルコール症候群の母親の子どもの脳は、大脳皮質にしわが少なく、脳全体の容積は、正常の2/3程度大きさです。

17～25週では、臓器分化特殊化期で、移動した細胞が特殊化して、臓器を作り成長していく時期です。

人間の脳は、22歳頃に完成しますが、この時期は、は虫類の脳といわれる脳幹が作られます。

26～39週では、特殊臓器発達期で、脳幹の上の感じる脳といわれる大脳辺縁系、特に危険などを察知する扁桃体が発達します。

この胎児期に発達する聴覚の回路で、母の心臓の鼓動や血液の流れ、母の話し声や歌声などを聞き分ける回路ができます。ですから、生まれてすぐに母を識別でき、自分の生存を確約することができるのです。これは、自然の摂理ともいえるでしょう。

このころ、胎教として、音楽を聴いたり、母親が精神的に安定することが大切です。

乳幼児

出生～2カ月では、多大な刺激に対する自己調整を行い、目で追い、家族の声に反応します。

母親の目に神経を集中することで、視覚の部分に脳神経回路が発達します。

この間に視覚が刺激されないと、目を開いていても、見る回路が育たないといわれています。

人間の絆の芽生え

2～3カ月では、家族の笑顔に笑顔で応えるなど、大切な人々と決定的な絆を結び、愛着の始まりです。

目がはっきりと見え始めます。

母親の心臓の音を聞かせながら乳を飲ませることが、脳の発達を促します。

抱かないで乳を与えることは、児童虐待であるとも言われています。

4カ月では、「母と子のダンス」と言われる、意味のある情緒、感情の対話がはじまり、お互いに影響しあい愛着を深めます。

情緒ある感情の対話をとおして、親子の愛着関係を深めていく、大切な時期です。

このころ「抱き癖がつく」と非難する人がいますが、それは間違いです。

10カ月～1歳では、「自己」の観念を持ち始めます。自分の要求を表現することができ、母又は世話をする人がそれを満たすことによって、信頼感と愛着を深めます。

日本での子育ては、子どもの欲求を察してあげて世話をする。母が子どもの一部であるといった感がありますが、母親は、子どもの延長でないと気づき、「自己」と「他」の分離ができるようにすることが大切です。

米国での子育ては、自立させようとする。「泣いても、ママは貴方でないから分からない。ちゃんと言葉で話してごらん」といった対処をします。

幼児期

1歳半～2歳では、社交的感情が発達し、恥、恥ずかしい、罪悪感、同情、共感、道徳心が発生します。他人の感情を実演し、「振りをする」。他人の悲しみや痛みに思いやることができるようになります。

幼稚園、保育所等は、他人の感情を実演し、「振りをする」。他人の悲しみや痛みに思いやることを学ぶ大切な場所です。

2歳～2歳半では、高度な「自己」と「他」の観念。基礎となる人格の形成「三つ子の魂百まで」。空想のゲームに興じる。こうすればああなるという規則が分かるようになります。

3歳～5歳では、親との肉体的分離の経験、複数の他人と相互関係を結ぶ能力が発達します。

以上、簡単にエッセンスをまとめましたが、被虐待児に係わる場合、愛着障害の理解は、すごく重要です。関心のある方は、ヘネシー・澄子著、学習研究社発行の「子を愛せない母 母を拒否する子」をご一読ください。